か。富士そのものの山容については北斎や広重の富士は、永山のない様式的な姿で描かれており〔図9〕、例外的に広重が「原」（保永堂版）〔図10〕で宝永山のある富士を描いている。保居は写実を意識したのか宝永山を殊更強調しているようである。そこには面的な多色表現による浮世絵版画とは一味違った、線刻のみによる銅版ならではの繊細な雰囲気が湛えられ、《富士川眺望図》が保居の初期の作例というより、円熟期へ至る時期の作品として江戸期銅版の優品というのに吝かではない。

因みに広重の「東海道五拾三次」五十五図の内、「保永堂版」では十一図に十五人、「行書東海道」では十九図に二十五人の人物が思い思いの姿で喫煙している。例えば、「川崎」（保永堂版）では六郷の渡し舟が前景に描かれ、舟中で二人の男女が煙管を手にしている。なかでも印象的なのは図10の富士を見返りながら煙管を手にした年増女の姿である。あるいは「見附」（保永堂版）の客待ちしている銜え煙管の船頭、「浜松」（保永堂版）のふんどし姿の人足や商人風の旅人。「池鯉鮒」（行書）の煙管から煙草の火を借りている旅人同士等々、いずれもまさに一服という寛いだ姿が伺えるが、描かれているのは男だけではなく、身分も上下様々である。

9・10　広重「原」（上・行書、下・保永堂版）

津」（行書）の煙管を片手にした馬子と馬の肢体。「原」（行書）や「金谷」（保永堂版）の構図等々、どこかそれらと重なる同種の雰囲気を感じるのは考えすぎであろうを感じるのは考えすぎであろうその殆んどが宝

勧業博物館の時代——明治十年頃の兼六園をめぐって

森　仁史

丹尾同人が毎度申されるごとく、金沢は今や金箔生産では全国の九割を超える占有率を誇り、工芸の町を自認している。二〇〇九年にはユネスコ創造都市のクラフト&フォークアート部門に登録され、これに基づいて金沢市は「クラフト創造都市」を名乗っている。二〇〇五年最初に登録されたのはサンタフェとアスワンであった。アスワンは古代エジプト遺跡の街であり、サンタフェはG・オキーフが晩年を過ごした街ではあるものの、アメリカ原住民やスペイン統治時代のフォーク・アートが色濃く残る都市なのである。いずれもが過去の遺産に彩られた街である。金沢は現代の創造に重点を置こうとしていて、伝統技法をてこに街を活性化しようとする意図を込めようとしていて、他の都市とは幾分ずれがあるように思われる。このてんでは、二〇一〇年に同じく登録を果たした韓国の新川市が陶磁器産地の歴史を現代の工芸創作活動の街として打ち出そうとしている姿勢に似通っているかもしれない。

しかし、こうした伝統技法はただ漫然としていたのでは現代にまで引き継がれるはずがない。とりわけ明治維新のもたらした激変は強い意志をもって乗り越えなければならなかったはずだ。明治七年（一八七四）六月一日から金沢公園（現兼六園）において、木谷藤十郎ら三十三名の市内有志者が県当局と一体となって開催した金沢博覧会はそうした企図に支えられた試みであり、『金沢古蹟志』（金沢文化協会、昭和八年）にその経緯が詳しく記されている。彼らは内務省からは御物となった名古屋城金鯱を、博覧事務局からは舶来の新器械等八十七品を借用することに成功し、これを交えて六万二〇五〇点もの出品物を並べ、三十日間で七万余の入場者を集

め大きな成功を収めた。この好評と効果を踏まえて、九年木谷ら有志者は公園内の巽御殿（前田家十三代齊泰の母隆子のための隠居所、現成巽閣）の建物の下付を受けて博物館を設置しようと働いた。『石川県勧業博物館創立十年略記』（〔明治十七年〕）によれば、この博物館は「各府県ノ産物ヲ漸時買備」して列品とした。翌年の第一回内国勧業博覧会への出品に当たっては、「本館ニ持出シ品評ヲ受ケ」ることとし、地場産業振興の一翼を担い「改良進取ノ階梯」となった。

最近、「金城公園内博物館」〔図1〕と墨書された鶏卵紙名刺写真を入手した。裏面に「石川県金沢御歩町・吉田好二」とのゴム印が押されいる。吉田は『石川写真界・沿革と作品』（能登印刷、一九七九年）には明治四年東茶屋街に近い観音町で開業したとあり、御歩町はこの地名からさほど遠くない場所なので、この印画も創業に近い時期の撮影かと思われる。墨書の館名からすれば、明治九年の開館のころと思えるが、吉田は明治十三年建立の日本武命像も撮影しており、その後も営業を続けたようなのでこの写真が博物館創建の頃のものであると即断はできない。画面に見える門は現在とは形式が異なっているが、「金沢公園勧業博物館之図」（明治二十四年、有隣堂）〔図2〕を見ると現在と同じ形式の門が描かれているので、これ以前の姿かと思われる。建物の二階には幔幕らしいものが張り巡らされているので、何か大々的な行事のときに撮影されたように思われる。同時に手に入れた吉田撮影の日本武命像の写真印画〔図3〕は知られている画像よりもピントが甘くなっているので、販売用の複写のように思われる。明治前半の営業写真館の有り様を伝えているようで興味深い。

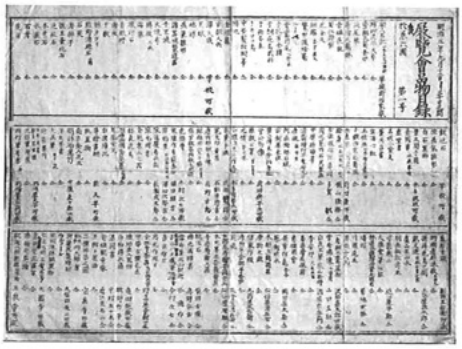
1「金城公園内博物館」

2　杏山画・中村月嶺鐫「金沢公園勧業博物館之図」（部分）

3「金城公園内紀念碑　日本武命之鋳像」

このように金沢においてきわめて早い時期に博物館が設置されたのには様々な要因が重なっている。単に突出した先覚者がいたからというわけではない。そもそも明治維新、とりわけ秩禄処分によって加賀藩士の御用（武具ばかりでなく能楽、喫茶、香道など）によって成り立っていた諸種の製造職人は一気に需要を失い、塗炭の苦しみを味わわなくてはならなくなった。明治二年十二月に鞘師、蒔絵師、仕立物師ら十名が連名で金沢市に差し出した文書には、「一統難渋至極此末如何可相成与何茂心痛至極仕候」とあり、まさに悲鳴が聞こえんばかりの文面なのだが、武士たちにも彼ら職人に救済の手を差し伸べる余裕はなかった。

また、前田家は大藩でありながら維新に一貫して加担していたわけではなく、むしろ鳥羽伏見の戦いの後に急いで新政府に東北討伐への参加を願い出る有様だった。従って、明治政府は金沢の士族を手厚く対処しようとしてはいなかった。その端的な表れは明治五年九月県庁の石川郡本吉（美川町と改名）への移転（～六年一月）であり、これにより金沢は急速に人口が減少し、活気を失ったとされる。こうした窮地の打開策として博覧会事業が企図されたのであった。実際、この年九月に中屋彦十郎、森下森八らが前田家や市内名望所蔵品七百点余りをを集めて、展覧会を開催している。その目録〔図4〕を見ると、学校所蔵の「地球」、「陸蒸気雛形」や岩石標本などの理科機器以外は書、絵画、置物、文房具、仏具など殆どが家伝の宝



5　展覧会品物目録（1872年）

物であり、新規製作品は含まれていないようである。形式内容とも近世までに出現した開帳や虫干しに近い見識に基づいていたと言えよう。しかし、これが二年後の博覧会への伏線となったのであり、先の『十年略記』でも博物館の「原素ト云フモ過称ニアラサル」と述べている。ただ明治七年の博覧会もあくまで過渡的な事象だとすべきであろう。なぜなら、その上申文書では「古製の物品を見て先哲の遺跡を追想し、新巧の機械を見て人智の開進を知り、遠くは万国の物産をも一目の下に瞭然たらしめ、大に智識を発達せしむ。」ことを目標と掲げており、明治五年一月の文部省博物館布告を引き写した啓蒙主義的な姿勢のみを強調しているにとどまっている。これは同年五月に墺国博覧会事務局が「御国ノ名品製造方勉メテ精良ニ至広ク各国ノ称賛ヲ得彼日用ノ要品トナリテ後来輸出ノ数ヲ増加スル様厚ク注意可致事」を目標に掲げ、博覧会の目的を単なる物産の陳列から殖産振興へと拡充し始めていた立場と差があるとしなければならない。

もちろん、多数の士族が鬱屈した状況のもとにおかれていれば、政治的にそれを覆そうとするのが自然な成り行きだ。じっさい、明治十年の西南戦争勃発に際し西郷に同調しようとする者が現れたし、翌十一年の愛国社大会に参加する石川県士族も登場したが、決定的に全体を率いる力にはならなかった。だが、そのなかで明治十一年五月十四日の紀尾井坂事件が起こっている。このとき内務卿大久保利通を暗殺した六名の内五名が石川県士族であったのだ。従って、同年十月に金沢に明治天皇が巡行したときには、川路利良大警視以下警部三十余名、巡査三百四十余名（総員七百九十余名）ものものしい隊列でなければならなかったのである。実は金沢ではこれ以前明治二年八月に、筆頭家老本多政均が二名の藩士によって藩庁内で刺殺されている。本多は大政奉還に際し慶喜に大阪退去を進言した人物であり、前田斉泰・慶寧に仕え京都御所警護にあたり、家中では勤皇派として行動していたことが背景にあった。さらにこの後四年十一月、本多の家臣十二名が仇討ちを果たしており、紀尾井坂事件の中心人物の一人島田一良は本多家家臣の吟味役の一人であった。このように、旧秩序と新時代の軋轢のなかで、やり場のない憤激が暴発しかねない空気が明治十年前後の金沢に渦巻いていた。しかし、加賀では士族たちは士族反乱にも民権運動にも動くには至らなかった。

長谷川準也（一八四一―一九〇七）は、明治六年金沢町総区長に就任したとき、前田家支藩であった七日市藩内の富岡に製糸場が創設されることを知り、大工津田吉之助と大田篤敬及び旧藩士子女十五名を派遣し、工場建設と機械操作を学ばせた。フランスの製糸技術を導入した富岡では蒸気機関を動力としていたが、津田は金沢でより容易に得られる水力を利用する機械に翻案することに成功した。津田は非凡な大工で、明治八年に尾山神社に独創的な形式の神門（現存、重要文化財）を設計した人物である。長谷川は旧藩士に出資を募り、官金と合わせて翌七年金沢製糸会社を設立し、製糸機百座、工女二百名の工場を運営し、横浜に出荷した。士族に養蚕を呼びかけ、明治二十三年まで経営にあたった。また、明治十年銅器象嵌業の衰微をおしみ、銅器会社を設立し、内外の展覧会に出品し、第一回内国勧業博覧会で名誉龍紋賞牌、十一年パリ万博で銀牌を獲得した。ここには一時は職工五十名ほどが雇われ、地域の殆どの名工名人が集められた。今日、《金銀象嵌兜香炉》（明治十年、石川県立美術館蔵）を始め、伝来の技法を新時代に生かそうとする優れた作品が伝わっている。

長谷川と同年代で磁器制作に心血を注いだのが碧海阿部甚十郎（一八四二―一九一〇）である。春名繁春と組んだ《色絵金彩龍図遊環花瓶》（石川県立美術館蔵）がよく知られている。阿部家は御馬廻御用支配の家柄で、甚十郎は長崎留学（一八六五―六）を経て、七尾奉行を努め、戊辰戦争に

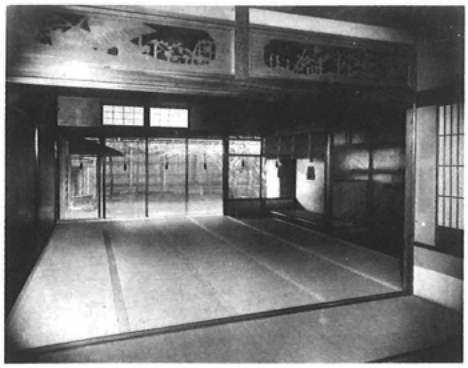
従軍し、明治維新を迎えた。明治二年から自邸に絵付工房を運営し、石川県からウィーン万博出品に向け買い上げを受けるまでになった。明治十年内国勧業博覧会では龍紋賞を受け、翌年のパリ万博では銅賞を獲得した。

明治十一年明治天皇一行は長野、新潟県を経て、十月二日金沢に到着し、南町四十三番地ノ一中屋三吉宅に滞在した。三日は県立師範学校、金沢区裁判所、石川県庁、勧業博物館と兼六園、上野練兵場、金沢医学所を巡幸し、翌四日は名古屋鎮台金沢営所、中学師範学校、撚糸会社、製糸会社、銅器会社を回り、銅器会社では象嵌花瓶などを買い上げた。天皇巡幸に合わせて、博物館は西洋館（もと鉱山技師デツケン住居）、旧育英学校ほかの建物を買い取り施設を拡充していた。同行した右大臣岩倉具視は製糸会社、銅器会社を創設した長谷川準也・大塚志良兄弟に褒詞を与え、五日朝一行は金沢を出発し、滋賀県に向かった。金沢での大半の訪問先が公的機関であったなかで、士族の起業した会社を訪れ、激励したのは明治政府が地方在住の士族に期待するものを明瞭に指し示していた。

戦前の日本においては明治天皇の事蹟は一級の史的価値を与えられ、聖蹟と位置づけられた。これらについて、昭和十年（一九三五）に文部省史蹟調査会が編集した『明治天皇聖蹟』と題する調査報告が刊行されている。ここには全国二十二府県四十二ヵ所の明治天皇小休所と行在所について、簡略に保存状況を記述し、平面図とコロタイプ図版が収録されている。この調査報告作成担当者として戦後の歴史学に足跡を残すことになる荻野仲三郎、古谷清、黒板勝美、上田三郎の名が記されている。もちろんこのなかに金沢行在所も収録され、中屋三吉宅居室の図版〔図5〕も掲載されている。明治十五年発行の引札「官許本舗中屋彦十郎」に描かれた絵と較べると、店舗に向かって右側の門を入った居宅だったようである。この店舗はその部材を使って老舗記念館として今は市内長町に再建され公開されている。居宅も金沢市内の湯涌創作の森に移築され、保存されている。中屋家は寛文年間創業の老舗薬舗と伝えられ、維新後も明治五年に文部省から、九年に内務省衛生局から薬品製造の免許を得て、意欲的に新時代に道を切り拓こうとしたのであり、であるがゆえに博覧会発起に名を連ねたのであろう。現在も市内菊川に中屋彦十郎薬舗として存続している。

また、この報告書に記載された行在所は個人住宅が十三、寺院・公共施設が二十五となっているが、これらのうち六割にあたる二十三ヵ所（個人住宅七、公共施設十六）の行在所では、主たる居室のほかに庭園の図版〔図6〕が掲載されていることが眼を引く。これは天皇が滞在した室内だけではなく、彼の視野を楽しませた空間までもが聖蹟であるべきだという感覚の故ではなかろうか。このことは日本人の空間の感受の流儀と広がりがなさしめるところのように思われる。いったいに日本人の空間に対する美意識やその対象としての庭は近代の到来にも殆ど揺るぎがなかったように思う。明治六年に公園概念が新たに移入されたものの、庭は価値観や概念において西洋から殆ど浸食されなかった。

阿部甚十郎は十三年には先の春名らと九谷陶磁器会社設立の盟約書を作成しているが、これは実現しなかったようである。恐らくこの頃には実験的な陶磁器制作の資金が枯渇したものと思われ、この年十月には石川県勧業課製陶図画考按掛として雇用され、勧業博物館に勤務するようになる。



5　明治天皇金沢行在所御座所（中屋邸）

6　明治天皇小松行在所庭園（本蓮寺）

明治十一年石川県は博物館を「起因スル専ラ勧業ヲ主トスルモノニ付」勧業博物館と改称していた。十三年七月に博物館は博物会社から県立に移管された。また、同年八月には博物館に集まって図案の批評会を開き、中央の龍池会と連携を図っていた人々が蓮池会を結成しているので、この一連の動きは阿部の行動と何らか関連すると考えるのが自然だろう。蓮池会はその名称を彼らが集まった公園内の池の名称からとったところも龍池会に倣っていた。

この時期になって、中央が志向する輸出振興に向けた地場産業の近代化への換骨奪胎を地域で推進する主体と組織が成立するのである。伝来の技法を伝統を墨守することにではなく、新来の美術概念に対応する造型に結びつける筋道を切り拓く仕事である。職人仕事を美術作家に転換させるためには、作り手の意識変革と新しい美意識への転撤が不可欠であり、彼らはこれを博覧会や蓮池会を通じて推進しようとしていたのである。こうして美術概念の移植と輻輳しつつデザイン改良を進める仕事が彼らの中心的な課題になり、これが殖産興業、富国強兵と直結するところに士族たちは満足すべき使命感を感じないではいられかったのだ。

明治十六年（一八八三）五月に博物館では開館十周年紀念展覧会が開かれ、十一万六〇一四点が展示され、三十一日間で十二万もの来場者があった。このとき、農商務省から公務局御用掛高峰譲吉、農務局後藤達三、博物局供議人若井兼三郎が派遣され、展覧会出品者へ教示するだけでなく、産地を巡回指導した。高峰、後藤は農工を、若井は陶銅漆器を担当した。

この明治十六年までに博物館は十一万三七一七品の所蔵品を備えているが、このうち九万巻は図書部であり、工芸部（県下算出ノ銅漆器改良ノ参考品其他百工芸術上ニ関スル諸品）は七〇二〇品であり、古器物部二六六品を加えても全体の六％でしかない。所蔵図書については『石川県勧業博物館書目』（明治三十四年）があり、これを見ると大半は儒学の学問体系に従った漢籍であり、近世の学的体系そのまま引き継いでいたことが分かる。

明治二十年（一八八七）七月勧業博物館を仮校舎として金沢区工業学校（現、石川県立工業高等学校）が設置され、納富介次郎が校長に就任した。十月二十六日開校式が行われ、四高施設の視察に来沢した森有礼文相が出席し、島田佳矣が生徒代表として祝辞を読んだ。蓮池会はかねて画学校設立を目論んできたが、納富はそれを美術振興全体を網羅するものに変更させたようである。このため学校は専門画学部（本邦歴史科、支那歴史科…）、美術工芸部（描金科、陶画科…）、普通工芸部（色染科、裁縫科…）という羊頭狗肉然とした編成となった。この年にはG・ワグネルが金沢に招かれ講演したようで、阿部の筆になる思われるが未刊となった『勧業博物館創立二十年略記』（コピー本、石川県立図書館蔵）にその大意が収められている。ワグネルが「考案宜ヲ得レバ手数原料少クシテ却テ面白者アリ製造者タル者ハ此処ニ注目セザルヘカラズ」と勧めるところこそ阿部は我が意を得たりと感じたのではなかろうか。阿部はこうしたワグネルや納富の志向を彼のその後の使命として、一心に邁進したようだ。

しかし、阿部や蓮池会の路線が地域の殖産策として実現したのはこの頃までだった。納富は明治二十七年徳久恒徳知事の異動とともに追われるごとく富山県工芸学校に転じた。阿部の職務も二十一年には傭となり、二十四年からは隔日出勤となってしまう。ジャポニスムの衰微とともに工芸品輸出が翳りをみせると、一度栄華を体験した旧慣にしがみつくことの方を選ぼうとしたので、納富や阿部が徒弟制を公教育に置き換えようとする試みは排除されることになったのだ。伝統の根強い地では苦境にあっては保守体質から自己保身に傾くほかはなかったのであろう。阿部の最後の職は金沢地方裁判所の出張所雇であった。明治三十五年六十歳にして退職するに際し、裁判所職員から「惜別ノ験迄ニ」茶器一組が贈られている。かつて知行千五百石であった大身にしてみれば、淋しい引退と言うべきだろうが、それは意志的な先駆者に常につきまとう命運なのかもしれない。彼らの営為に感嘆する我らが登場するのは彼らの没後百年を経てからであり、いま伝統を声高に叫ぶ者が彼らの達成を顧慮することは殆どないのが現状である。まことに報われないと嘆息するのは我らだけなのだろうか。

一寸

第四十九号　二〇一二年二月

第四十九号目次

新・旧刊案内49
いわゆる「黄遵憲事件」と冬崖の死　青木　茂　1
「髪梳ける女」（橋口五葉版画）考
—故スティーブ・ジョブズ氏に捧ぐ—　岩切信一郎　9
時に抗いし者たち——私の小菩薩峠（5）　大谷　芳久　16
図画教育者列伝（五）　武村耕靄（その二）　金子　一夫　53
美童如是我聞録　丹尾　安典　58
唐物店丸福の『判元』帖から（三）
三点の保居《富士川眺望図》銅・石版画遺聞44　森　登　67
勧業博物館の時代
—明治十年頃の兼六園をめぐって　森　仁史　72
気谷誠の「別れの曲」と原口統三の
「ショパンの夜」1　山田　俊幸　77

新・旧刊案内49
いわゆる「黄遵憲事件」と冬崖の死

青木　茂

・はじめに

ここではまず「いわゆる」を説明しなければならぬ。一般に大逆事件、ゾルゲ事件、メーデー事件などという事件は司法当局によって裁判所に訴えられた事柄などで訴訟事件の略語ともいう。春峰庵は事件の名で知られているが佐伯祐三の贋作は事件の名で一般化されてはいないようである。「黄遵憲事件」はあったのか。『横山大観と近親の人々』のように疑問をもたず括弧なしで黄遵憲事件とする美術関係書もあるが、日本陸軍史や参謀本部地図課あるいは陸地測量部の歴史に関する文献には「黄遵憲事件」という用語、あるいは「事件」そのものもほとんど出てこない、まれにあっても括弧つきである。あるいは「木村信卿事件」である。

冬崖の死（明治十四年五月三日）については柏亭の「陸軍の地図紛失の件があり、彼は気の毒にも其責めを引いて自殺した」というのが一般的な理解であり、冬崖をもっともよく知り敬愛していた愛弟子小山正太郎の「先師川上冬崖翁」（『美術新報』明治三十六年）は冬崖晩年の参謀本部地図課での一挿話を残すのみで、みずから口を噤んで物を言わなかったようである。柏亭に「気の毒にも」と言わせ、小山に何も言わせなかったのは何故か。何はともあれ十四年二月二日参謀本部会計軍吏補服部道門は新築の本部二階から投身自殺し、その前々日一月三十一日に元地図課長で非職陸軍少佐木村信卿その他四名が陸軍裁判所へ拘引され、服部と同じ二月二日陸軍御用係測手大島宗美は工兵大尉小宮山昌寿とともに出張中に現川崎市高津区二子の旅人宿亀屋で割腹自殺を遂げた。五月三日、冬崖が滞留して